

コロナ禍の入試 再考

東北大でシンポ 日本の制度 特徴解説



コロナ禍が大学入試に与えた影響を論じたシンポジウム

大学入試のよりよい在り方を研究する「大学入試学会」の公開シンポジウム「コロナ禍は大学入試をどう変えたのか」が22日、仙台市青葉区の東北大青葉山新キャンパスであった。同学会理事長の倉元直樹東北大教授ら4人が登壇し、コロナ禍への対応で浮かび上がった日本の入試制度の特徴を解説した。

倉元教授はコロナ禍の対

応に関する国際比較を紹介した。日本、中国、韓国は選抜時期を調整したのに対し、欧州各国は試験は行わず、高校時の成績を基に入学者を選抜した。

倉元教授は「『受験生の長年の努力を測定すべき特性とみなし、告知した選抜方法を変えることは許されない』という日本社会の価値観が浮き彫りになった」と語った。

海外ではコロナ禍を契機にCBT（デジタル端末を使いオンラインで出題・解答する方式）の導入が進んだ。大学入試センターの寺尾尚大准教授は「日本では安定を強く志向する分、革新が起きにくい。緊急時対応ではなく、平時における課題解決の道具と位置付けた方がいい」と指摘した。

シンポジウムは同学会の第2回大会（20〜22日）の一環で、東北大との共催。約100人が参加した。